

女性MANGA研究プロジェクト (Women's MANGA Research Project)

筑紫女学園大学 文学部 教授

大城 房美

(お問い合わせ先) TEL : 092-925-3511 E-MAIL : fogi@chikushi-u.ac.jp



研究の背景

MANGAは21世紀以降のグローバル化の過程において、コミックスに大きな変化をもたらしました。そのひとつが女性参加者の増加です。コミックスは少年/男性を中心とした文化でしたから、確立した女性市場を持つマンガの海外への参入は、*NY Times*で取り上げられるほど、注目を集めました。

まず私たちは、「女性」とMANGAのグローバル化に着目しました。近年、海外の女性作家の多くはMANGAをきっかけに活動を始め、女性が主体的に加わることで画期的であると認識しています。新しい参加者として彼らが描いたのは、「女性」というラベルによるグローバルな均質化にとどまらない、自身の日常や問題意識を含む多様な表現でした。そこで私たちは、「グローカル化」(グローバルとローカルの複合概念)をキーワードに、社会・歴史的影響をグローバルに及ぼした3大コミックス(マンガ[日本]、アメコミ[米]、バンド・デシネ[欧])から、それを越えゆく可能性を模索する「地方」としてのアジアとその担い手としての「女性」に着目し、研究を始めました。

研究の成果

「女性MANGA研究プロジェクト」を総称として、私たちはアジア各地で国際会議を開催し(京都、シンガポール、ハノイ、シドニー、香港、マニラ、北九州、など)、ネットワークの構築に努めました(写真1-5)。新しい分野ゆえに、研究者の専門は多岐にわたり、現地文化、女性学、文学、ジェンダー論、文化論、社会学、メディア研究、ファッション、美学など多彩な研究報告がなされました。私たちは日常性を重視し、現地の作家や一般のファンの参加にもこだわりました。作家・読者・研究者という異なる立場から、多国籍の参加者の間で熱心な討議を行い、成果として『女性マンガ研究』(青弓社2015)

を出版し(写真6)、2018年には、英文2冊の研究書の出版(Palgrave)を予定しています。

今後の展望

MANGAと「女性」の主体性の関わりが、ローカルな文化の変容を反映し、独自の表現を生み出す一方で、日本マンガによって触発されたMANGAというメディアは、「ローカル」というフィルターを通ったことで、単純には元の「マンガ」に還元されません。MANGAが取り持った「新しい参加者」である「女性」は、Tita Larasatiの“Graphic Diary”(インドネシア)やQueenie Chanの“Comics Prose”(オーストラリア)など、新しいジャンルを切り開きました。FSc(シンガポール)は、日本、アメリカ、東南アジアを含みながらもそのどこにも定義されない「かわいい」世界を描き、「女性」や「アジア」というアイデンティティを決定する「ラベル」への挑戦を行っています。「女性」が不在であったジャンルに「自分たちの表現」を創るうとする動きには、今後どのような多文化・多言語の表現が生み出され、共有されてゆくのでしょうか。MANGAの派生領域における文化的な差異や規制の問題を含めたさらなる検証が、私たちの新たな課題であると考えています。

関連する科研費

2009-2011年度 基盤研究(B)「女性MANGA研究：主体性表現の可能性とグローバル化—欧米/日本/アジア」

2012-2014年度 基盤研究(B)「女性MANGA研究：グローカル化と主体性表現—アジアを中心として」



写真1 シドニー大学での国際会議の様子(2013)



写真2 ニューサウスウェールズ州立美術館でのアーティスト・パネルの様子(2013)



写真3 ニューサウスウェールズ州立美術館の前で参加者たちと(2013)



写真4 香港のコミックス・ホームベース(Comix Home Base)での国際会議の様子(2014)



写真5 アテネオ・デ・マニラ大学での国際会議の参加者たちと(2015)



写真6 『女性マンガ研究 欧米・日本・アジアをつなぐMANGA』表紙